

シリーズ隠れた建築紹介～三味のある風景～

墓地の隣に住んで7年になる。訪れる人は気味悪がるが、住んでしまえば静寂の上なく快適である。我が家の隣の共同墓地の、それも我が家に一番近く、石塀に囲まれた近隣の御大家の墓地に、ほんの2、3年前に、先代が昨今稀な土葬をされたと聞いたのは、ここで暮らしはじめて間もなくのことであった。

日本では土葬または火葬という二つの方式のうちどちらかが選択されてきた。福井県では主に越前地方で火葬が、若狭地方では土葬が多く見られ、後者では両墓制をとる地区も多い。両墓制とは埋葬する墓と参拝する墓とを別に設けるもので、埋め墓は集落のはずれの一角に卒塔婆ないしは自然石を置くだけの簡素な墓域とし、中には一切の墓標を建てない地区もある。参り墓は寺の境内に設けて戒名を刻んだ石塔を建てた。若狭に比べて浄土真宗の浸透が濃厚だった越前の農村部では、各家庭に神棚を祀らないことや正月に注連縄を飾らないことなど、他の地方では一般的な民族信仰や民族行事の多くが消滅し、あるいは新たに定着するに至らなかった。越前で火葬が一般的になったのも浄土真宗の教団あげての指導の結果であったという。

近年まで、これを反映した景観を越前の農村に見ることが出来た。集落から田圃数枚隔てたところに作られた三味(サンマイ)である。三味とは火葬場と墓地とを合わせた施設で、集落の規模にもよるが広さは田圃一枚分ほどといってよかろう。多くは北入りで、南端寄りに遺体を焼くための炉を置き、中央を南北に貫く参道を挟んで墓石が向かい合うという配置形態をとる。炉の火袋には炎に強い浜住石(ハマジイシ)が使われる。福井市の海岸近くで採れる凝灰石である。炉の脇には松や樺、タブなどの巨木がそびえ、掻き出した灰の養分のせい、その根元には季節の草花が咲き乱れる。灰の中には金歯が残っていることもあるという。

炉は古くは露天であった。やがて何時の頃からか4本柱の切妻屋根で覆われるようになった。その時期は古くてもこの地方で越前瓦が焼かれるようになる18世紀末を遡ることはあるまい。次いで入口を除く三方に壁がめぐり、煙抜きの越屋根が付くようになる。規模は梁間1間半に桁行き2間ほどか。棟の方向はこの地方の民家で一般的な妻入りである。20年ほど前まではお寺の屋根や鎮守の社叢とならんで集落景観にアクセントを与えるこうした三味の風景をここかしこで見ることが出来た。いまでは自治体の火葬場での火葬が広まって伝統的な三味の風景がどんどん失われ、その多くは味気ないただの墓地と化してしまった。

ここに紹介するのは福井市小野(コノ)町に残された三味である。壁が付く前の古い形式を伝えている。西側には小丘を残して季節風を防ぎ、灰捨て場の松は枯れたがタブの木は見事である。市街地から遠く離れた小野地区ではいまでもすべてこの三味で火葬を行うという。小野地

区の人達が天国へ還る入口を象徴するこの三味の風景をいつまでも伝えてほしいと願わずにはいられない。

—福井大学・福井字洋



金沢でのまちづくりフォーラム報告

昨年(1996)の9月26日、「北陸における市民参加型まちづくりを考えるフォーラム」が金沢市民芸術ホールで開催された。主催は地域・都市研究会(過去10年間にわたり、自主的に若手専門家が集まり研究交流を行ってきた)である。

基調講演には上野真城子さん(ワシントンD.C.のアーバン・インスティテュート研究員)を招いて、アメリカ市民社会の強さを支えているノンプロフィット・セクターと、政策をつくり社会を動かしているシンクタンクの重要性を紹介いただいた。

次に安江雪菜さん(統計画情報研究所研究員)から、北陸の市民参加型まちづくりについて「よらんかいね輪島」「こまちなみ保存(金沢市)」などの事例紹介が行われた。

その後、川上光彦氏(金沢大学教授)をコーディネーターとして、具体的にまちづくりに携わっている市民や専門家とパネル・ディスカッションが行われた。金澤東山まちづくり協議会の中村駿氏からは、マンション反対運動を含む、まちを愛する人々の熱い思いが紹介された。五十嵐由利子さん(新潟大学教授)からは、子供たちとのカメララリーなど、まちづくり教育のほほえましい取組みが語られた。陣内雄次氏((財)地域振興研究所)からは、父親と子供が一緒に参加する商店街を活性化するためのワークショップの試みが紹介された。坂本英之氏(金沢美術工芸大学助教授)からは、輪島の新しい都市ビジョンをつくらせよう、都市マスを補助なしで、従来の制度を超えた計画策定を目標に市民参加で取り組んでいる紹介や、ドイツでは「エー・フォー」と呼ばれるNPOの各種団体のどれかに国民は全員属していると言われている草の根運動が紹介された。佐々木雅幸氏(金沢大学教授)からは、金沢のまちづくりや保存運動を支援してきた経験から、少数意見を社会に反映していく手がかりが金沢ではまだ見えない点などが指摘された。再び上野真城子さんからは、アメリカでは小学校6年生で模擬大統領選挙を行うなど民主主義教育が進んでいることなどが紹介された。下河内司氏(金沢市助役)からは、逗子では樹木や虫や文化財をきめ細かくメッシュの落としとして高層マンションに規制をかけた経験や、宮野さんという市長は、市長になられても住民運動を続けたという熱意などが紹介された。

最後に伊藤悟氏(金沢大学助教授)から、組織化のための環境の整備、学習機会の拡大、パートナー・シップの確立、の3点がフォーラムの結論としてまとめられた。

—広報部会・増田達男

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第9号

発行日 1997年2月20日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

松澤 茂(新潟) 尾久 彩子(富山)

船戸 慶輔(石川) 増田 達男(石川)

桜井 康宏(福井) 土本 俊和(長野)

事務局 室田 文男・瀬口さゆり

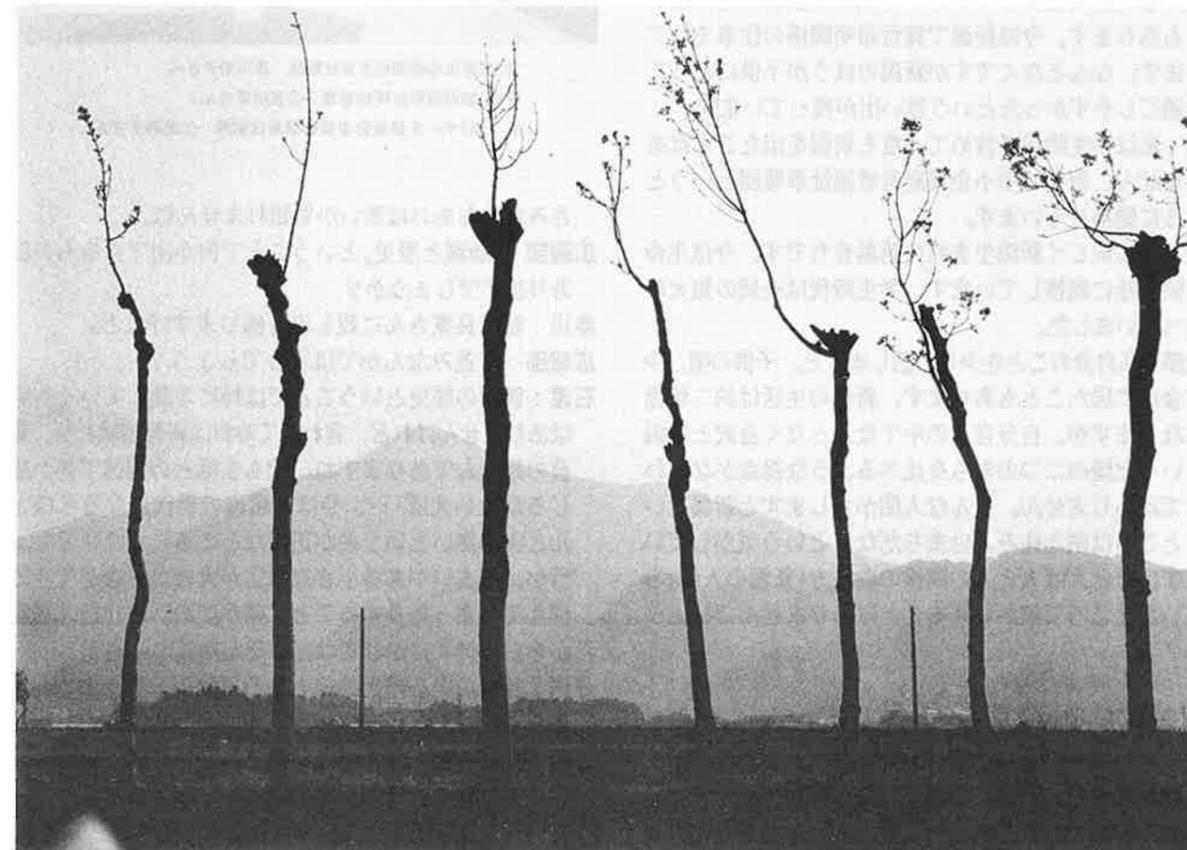
〒920 金沢市玉川町5-15

TEL 0762-20-5566 FAX 0762-60-1502



特集

若い女性の新潟論



支部ニュース「AH!」の第9号をお届けいたします。「新年明けましておめでとうございます」という時期に発行のはずが2ヶ月近くも遅れてしまいましたが、この間、ロシアのタンカー事故による重油流出災害という予期せぬ事件によって、北陸という地域が「環日本海」の一翼であることと、環日本海時代への課題が多様で複雑であることをいろいろな意味で教えられているように思われます。

さて、第6号からメインテーマとして取り上げている「北陸らしさ」について、今回は、新潟で働く若い女性3人から率直な新潟論をうかがいました。私(広報部会長)などは、新潟の個性的存在という、かつて『日本列島改造論』を著した某大臣などを真っ先に思い浮かべてしまいますが、何となくさめた若者世代の代表を相手に悪戦苦闘(?)した広報部員は、その印象を「消極的個性の新潟」とまとめております。これには異論を唱える新潟人も多いかもしれません。挑戦的な続編を期待したいと思います。

若い女性の新潟像

広報部：きょうは新潟生まれで新潟育ち、お仕事は直接的には建築には関係のない、若い世代の方々にお集まりいただきました。意図せずして私以外は女性のみとなっていました……先ずは自己紹介と「新潟らしさ」ということでなにか話のきっかけのようなものがあればお願いしたいのですが……

石渡：私は新潟生まれですが、子供の頃長野に住んだこともあります。今は新潟で舞台照明関係の仕事をしています。なんとなくですが新潟のほうが子供にとっては過ごしやすかったという思い出が残っています。

二瓶：私は学生時代を含めて一度も新潟を出たことはありません。現在は中小企業経営者福祉事業団というところに勤務しています。

赤川：私も同じく新潟生まれの新潟育ちです。今は生命保険会社に勤務しています。学生時代は長岡の短大に通っていました。

広報部：私自身のことを少しお話しますと、子供の頃、少し金沢に居たこともあります。新潟の生活は約二年程になりますが、自分自身の中でなんとなく金沢と新潟という北陸の二つのまちを比べるような視点がないわけではありません。そんな人間からしますと新潟というところは割と住みよいまちだな、という気がしています。たとえば人と人の関係の取り方「新潟の人情」みたいなところで何かいえることはありませんでしょうか？

何となくさめている？

二瓶：これは特別新潟に限っていえることではないかも知れませんが、ひとつには自分以外のことに目が向くところがあるかも知れません。そしてなんとなくさめているような気が私はしています。

赤川：私は、これは気候のせいもあるかも知れませんがなにかさっぱりしない気性というようなものがあると思います。うじうじしてるような……

広報部：例えば金沢は子供心になにか馴染んでゆくの時間がかったような気がします。何となく歴史の重みが人のコミュニケーションのしかたにも感じられるような気がするのですが、新潟はシンプルというか、ひとの心のわかりやすさがあるといえませんか……

石渡：外からくる人が入りにくいところではないと思いますが……そして地味ですね。

二瓶：私も同感です。ただ新潟といっても広いですし、言葉なんかでも地域で違いますから新潟というくくり方で何かいえるかという難しいですね。外から見た新潟というのも経験がないですし。歯切れのいいノリのよ



左: 日本生命保険相互会社勤務 赤川明子さん
中央: 新潟照明技研株式会社勤務 石渡瑞恵さん
右: (財)中小企業経営者福祉事業団勤務 二瓶舞子さん

さみtainなものは無いかも知れませんが……

広報部：「新潟と歴史」ということで何か出てくるものはありませんでしょうか？

赤川：私は良寛さんに親しみを感じますけれど。

広報部：町並みなんかではどうでしょう？

石渡：新潟の歴史ということでは特に意識しているものはありませんけれど、言われてみれば新発田城とか、豪農の館なんてありますね。でも生活との関連で何か感じるかといえば……、やはり私達の世代になるとほとんど実感無いというのが正直なところじゃないでしょうか。佇まいがある小さなお店が大きなお店ができて消えてしまったりすることは確かにありますね。古町から白山神社にかけてなんかそんな気がします。

赤川：新潟の中心部と他のところでは少し違うような気もしますけれど……

二瓶：やはり金沢なんかと比較すれば当然ぱっと出てくるような観光名所的なものは無いと思いますし、なんといっても世代的にはそういう感覚は無いと思います。はっきりとしたイメージがあるのは佐渡なんかになると思います。

やはり自然と食物が…そして雪

広報部：皆さんからして「ふるさと新潟を実感する時」また「新潟のよいところ、好きなところ」、「新潟らしさ」ということで挙げるとすれば何になりますか？

赤川：やはり自然が豊かで四季の変化がはっきりしていること、そしてなんといっても食物がおいしいことではないでしょうか。お弁当屋さんのごはんから私は違いを感じます。よそと比べて……

二瓶：わたしも海がきれいだったり冬スキーができたるところだと思います。でも新潟の人間がみんなスキーすると誤解されているところはありますね……

石渡：なんといっても自然が実感できる場所です。

赤川：人の心でいえば辛抱強いところではないでしょうか。

広報部：これは北陸共通の問題でもあります。新潟での生活を語るときに雪のことが切り離せないと思います。雪と生活、という点で何かありますか？

石渡：生活上はやはり雪が降るととても嫌ですね。

赤川：車は必須です。

二瓶：雪が降るとどうしても帰りの足のことが気になって自然と家路を急いでしまうところがあります。

広報部：私のような通勤族からしますとこういった気候も一過性のもだから……と無意識のうちに思っているところがありますし、今のところ職住接近していますので、紅葉が終わった頃から始まる天候の悪さもそんなに重いものではないんですが、やはり地元の方の生活においては比重の重いものなんじゃないかな。

赤川：やはり生活がどうしても車型になるというところはありますね。

広報部：最近まちを歩いていて思いますのは、新潟では車で移動というのがあたりまえですし、冬場天気が悪くなりますと家に閉じ籠もりがちになってしまうわけですが、車で出掛けて郊外型の飲食店へ行ったり、ショッピングセンターで買物したり、レンタルショップでCDやビデオを借りてきて家でテレビ中心に過ごすという一つの生活の型があるような気がするのですが……

赤川：言われてみるとありますね。何か生活が一定のサイクルで回っているような……

なぜ専門学校へ？

広報部：では少し視点をかえまして、ご自分達の生活環境として現在の新潟を見た場合どうでしょう？

二瓶：若い人が遊べる場所なんかについて考えた場合、すべてが中途半端です。何か新しいものができても永續きしないですし、遊べる場所も限られています。駅周辺、万代、古町くらいです。

石渡：出掛ける場所がないというのはありますね。

広報部：そういった東京との比較で感じられる不足感のようなものは、やはりそれが新潟で実現すればいいなという感覚なのではないでしょうか？

二瓶：そうです。ショッピングできる場所、遊べる場所についてそう思います。

石渡：私もそれは変わってほしいところです。

赤川：教育についていえば大学進学率が低いということはいわれていますけれど……

二瓶：私がよく高校時代に聞いたのは、新潟では大学進学を選んで何となく将来の道が決まらないまま何年か過ごすよりは、現実的に就職に直結しやすい専門学校を選んだほうが良いと考える親御さんが多いということがありました。

石渡：専門学校への進学率は高いです。「手に職」をつけるという感覚が新潟にはあるのかもしれない。

広報部：たしかに専門学校は多いですね。「男が育たない」というようなことも聞いたことがありますが、そういうことは男も女もいわれるのでしょうか？

二瓶：そうです。

赤川：大学も増えてはきていますが県外からきている人もいるので一概に進学率はあがってはいないと思います。

広報部：人生いろいろ選択肢があるわけですし、大学進学することがいいとも悪いともいえないわけですが、「手に職」という感覚の出どころといえるものは何かあるのでしょうか？

石渡：どいうわけか「大学に行っても……」という考えの人が多くですね。もしかしたら農業県ということと関係があるのかも知れませんが……

二瓶：そうですね。

赤川：私は、ひとつには県内で進学しない場合はどうしても東京その他に出てゆくことになるので、それが就職時点でも新潟に帰ってこないということに繋がってしまうというのが親の側の意識としてあると思います。

広報部：高校生や若い人たちに地元でもっと学べる場所が欲しいという声はあるのでしょうか？

二瓶：私が高校生の頃は大学がもっと新潟にあればいいなと思いました。やはり県外へ出るとなると経済的にも負担が大きいですし、県内の大学の枠がもっとあれば……というところはあると思います。親にしてみれば外へは出たくないわけですからそれなら専門学校へ、という発想になってしまうのだと思います。そして就職に現実的に繋がりやすいのも専門学校なのではないでしょうか。

です。ですから新潟は専門学校の数も多いです。種類も多いです。子供の側も高校を終える段階で最終的に専門学校志望になることが多いです。

広報部：私はそういう選択をする時期に東京に居ましたが、改めて考えてみると大都市ならではの選択肢の多



広報部 松澤 茂



佳境に入った『長野市今井ニュータウン』建設工事

今長野市周辺では1998年開催の長野オリンピック冬季大会及び長野パラリンピック冬季大会にむけての施設整備が盛んに進められています。中でも選手村として利用される長野市今井ニュータウン建設工事は佳境に入って来ています。基本設計開始から約2年が経過し来年9月末には完成の予定です。

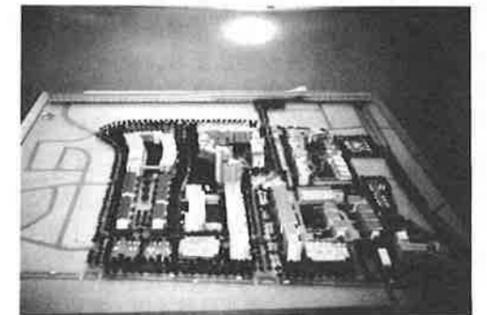
今井ニュータウンは長野市南部の川中島町今井に位置し、北陸新幹線(建設中)と平行して走る信越本線今井駅予定地の東側に広がる水田、果樹園等約11haを開発するもので、オリンピック村(約3000人)及びパラリンピック村(約1500人)として利用した後、改修工事を経て約1100戸の住宅団地として生まれ変わる予定です。

設計はプロポーザル方式にて決定した長野市外の設計者と長野市内の設計者による7組のJVチームにより、第1次及び第2次マスタープランを基にアーバンデザイン調整会議(UD会議)を中心に進められました。

工事は12工区に分割して発注されており、着工当初は造成工事とも重なったため、各工区の工程調整が非常に大変でしたが、夏場の天候にも恵まれ順調に進捗しているところ です。

設計・監理に携わることにより「長野オリンピックに参画できてよかった」と言う思いを心に秘め、来年の今ごろはオリンピックの顔として長野市のまちづくりのモデルとしての『長野市今井ニュータウン』が完成することを願っています。

一俵山口設計事務所 設計開発部 部長・井熊冬季治



町並みから思ったこと



初めて異国の土地に来ている。嬉しくてたまらない。ここはどんな世界だろうか。

清潔な町、きれいな空気がさっそく私を魅きつけた。周りの環境は清々しく感じられる。人々の服の色彩も中間色の方が多い。艶やかで人の目を奪うのが

少ない。日本人の友人と初めて付き合っ、そんな感じもする。声が優しく、礼儀が正しいようだ。言葉づかいも人を傷つけないようにしている。そんな習慣に慣れるまでに、肯定か或いは否定か判断はなかなか難しかった。要するに、何でも素朴であり、曖昧な感じである。

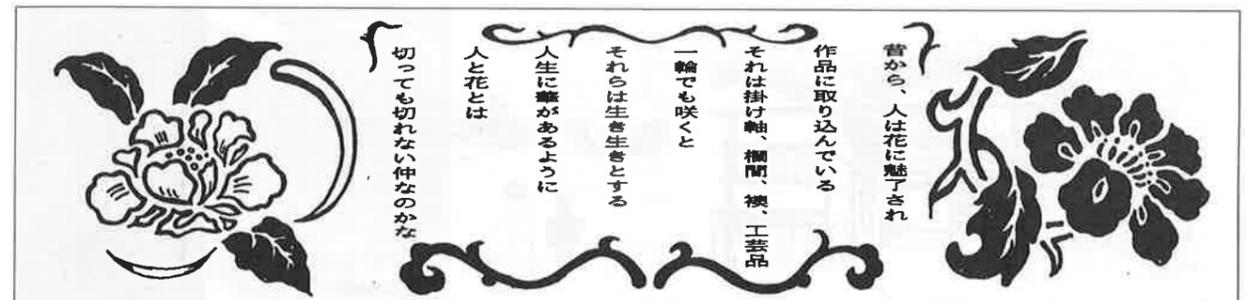
ある日、ある復元された古い町並みを見た。古風な雰囲気、素朴さ、優しさが私を感動させる。直線的な町並みは白黒と二つの色しかない。単体の建物の印象は薄く感じる。だが、全体を見ると美しい音のピアノ曲が流れるようだ。それぞれの単体はまるでなくてはならない音符のようだ。大きな感動である。

よく味わうと、素朴であるけど、単調なわけではない。密度の濃い美しい贅の重なりを見せてくれて、屋根の美しさに加えて、建物の前を勢よく音をたてて流れる前川と背景の緑を図に示す。各建物の細部も豊かだ。点、線、面の構図にしろ、色の白黒対比にしろ設計者の建物へ燃やされた情熱が感じられる。

この町並みから、日本についての感想を連想した。一言で言うと日本の掛け軸によく見る文字「和」である。私の見解から言うと、「和」とは周囲との協調だと思う。中国では「和して同せず」という言葉もある。人と合わせてせても、人と同じにはならないという意味である。

日本での留学期間はまた数年ある。この間に、この土地とこの土地で生きている人々の文化の体験をしたい。

一福井大学研究生・徐華



(長岡造形大学学生・田村 収)

さから来る気持ちはあったような気がします。

赤川：よくいわれるような小さい時からの受験教育みたいなものも新潟にはないんじゃないでしょうか。

広報部：専門学校の種類という点では、分野として若い人たちが学びたいというのに対応しきれたものがあるのでしょうか？

石渡：いろんな分野のものが増えました。デザイン、スポーツに音楽…種類も増えたいけれど根底にはやはり県外の短大に行くよりは、就職の問題が専門学校選択に結びついていると思えますね。

ここにも保守性が

赤川：就職ということでは必然的に専門学校選択になってしまうという面があると思えますし、女の立場から考えてみると女性が積極的に仕事をするとする感覚もあまりないような気がするのですが…私が今居る環境から考えると、私と同じような保険の外交をする人が求められているのにどうも新潟だけ募集しても集まらないという状況があるようです。その理由を考えると単純に言えば保守的というか…

広報部：それは女性が家に居たほうが良いという感覚がなんとなくあるのではないかとということでしょうか？たとえば皆さんと同世代の男性にもそういう観念はあるのでしょうか？

二瓶：何も新潟だからということにくれる傾向なのではないのかも知れませんが、なんとなくそういう古い観念みたいなものがあるような気がします。女はうちにいて…という考えの人は多いんじゃないでしょうか。

石渡：それはありますね。身近なところを見渡しても共働きというのがあまり無いような気がします。働く場所も無いから女性も外へ出て行かないというようなところがあるんじゃないでしょうか。

広報部：そうしますとたとえば皆さんのような世代からすると、また女性という立場からすると自己実現できるような環境がないというようなことがいえるのでしょうか？

赤川：何か明確な目的があったりする人はどうしても東京へ行ってしまおうようなところがあると思えます。そして東京から帰って来た人達は何となくさめているよ



うな気がします。

二瓶：東京から帰って来た人たちは一様にこっちはつまらないと言いますね。

新潟のこれから

広報部：きょうお集まりいただいた皆さんが決して元気がないというわけではありませんけれど、地域の活性といったような面からすれば必要なパイタリティーある人達が外へ出てってしまうというところもやはりあるのでしょうかね……。では現在の新潟に不足していると思えるものはありますか？また新潟というのは皆さんにとって住み続けたいまちといえるのでしょうか？

石渡：遊べるところがもっとあればいいと思います。そういった場所が少ないとどこへ行っても知ってる人に会うということもおこるし、楽しめる場所が欲しいというのは若い人であれ、家族連れであれそうなんじゃないでしょうか。

二瓶：トータルで見れば新潟というところはひじょうに恵まれたところだと思います。そして最初にお話しましたが、やはり良い意味で自分以外の人への興味が残っているまちだと私は思います。人工的な遊び場所が無い分自然で満たされているところもあると思います。

広報部：少し批判的な見方になってしまいますが県そのものが広くて、車で足をのばせば快適な自然があると都市化の弊害が見えにくいというような部分もあると思いますけれど……

赤川：いろいろ含めて考えると、こういう環境で楽しめる自然がなければ人が出ていってしまうのかもしれないね。

広報部：県内の違った地域、異なる世代や立場の方とお話すれば当然また違った考えがあったのだらうと思いますが、私なりに感じていました新潟像と重なるようなお話が伺えたので大変おもしろかったです。誤解を恐れずに形容しますと「消極的個性の新潟」とでもいい得るような「適度な快適性を備えたまち新潟」がなんとなく見えたような気がします。

—1996年12月4日収録—



休日に思う



今日は休みだ。本当の意味で休める日である。提出期限の図面は昨日の内に完成させた。半覚醒状態の意識の中でそんな事を考えている。昨日までの疲労感が不思議と今は感じない。ふいに日本海夕日ラインの海岸線が頭の中に浮ぶ。しばらく愛車にも乗っていない。予定が決まった。玄関を出るとシートを被った愛車が待っている。何日ぶりだろう？キーを差し込みセルを動かす。ほったらかしの愛車はすねて目を覚まさない。チョークを引き、キックを思い切り踏み込む。これは日常から離脱するための合図となる。十分に暖めてやってから出発した。

風が冷たい。もう冬が間近にせまっている。バイクは季節の移り変わりを誰よりも早く告げる。信号待ちでバイクを止めると、暖かい空気があがってくるのを感じる。実に心地よい一瞬だ。天気も良好だ。風もおだやかだ。新潟には珍しい。ちょっと波は高くなったが海の水は青く澄んでいる。風景の移ろいの中でぼんやりと思う。建築をデザインする。それは「人」が何かをする場（空間）をデザイン（創造）する事だ。建物を創り出す我々は、常にそれを使う「人」の立場で、より良いものを提供していく義務を負っているはずだ。この仕事に関わる人達は、誰しも建物を創り出す喜びを味わうために貴重な時間、労力、そして個人才能を費やしている。しかし、日常の業務の煩雑さや、雑音に乱されて自分の意志（理想）を見失ってしまう。それが本当に望んだ姿なのか？

風が変わった。馴染みの光景が広がる。目的地に着いた。青い海が遠くまで見渡せる。自分の関わった建物の完成した瞬間の記憶が甦る。この時の喜びが次の日への活力となってゆく。バイクにまたがりエンジンをかける。警戒に走り出した愛車と共に日常へと回帰してゆく。来る時とは明らかに違う気持ちを抱えながら。

一大成建設 新潟支店・相原利至

日本で見た、感じた

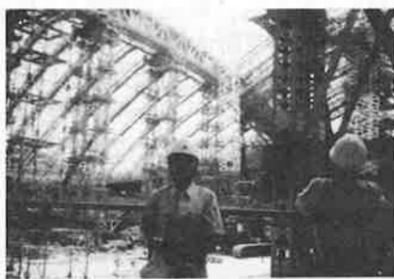
私は、ブラジルの建築の大学を卒業し、昨年7月から研修生として富山県庁の土木部営繕課で勉強しています。1週間に3回ほど建設現場に行き、実際の現場作業を見たり工程会議のやり方を勉強しています。そのほか、営繕課で課員の人たちから「建築計画」「建築法規」「建築構造」「建築材料」や「建築設備」などの研修を受け、毎日レポートを書いています。

日本の建築工事を見て感じたことは、工事費がブラジルと比較すると大変高いということです。ブラジルの工事よりは早く進むし、工事ロスは少ないので驚きました。ブラジルでは、やり直しなどの工事ロスは、工程の約15～25%もあります。工事ロスはお金もかかるし、工期も長くなるし、建物の品質も悪くなるので工事の監理は大事だと思います。

日本のライセンス制度にも驚きました。日本の建築専門家は建築士の資格を持っています。現場で作業する人たち（型枠・鉄筋・仕上げ・電気・配管等）もそれぞれライセンスを持っています。ブラジルでは、エンジニアだけライセンスを持っていて、重い責任を持っています。日本では、建築のいろいろな材料や、レベルの高い職人や近代化された技術が一つになっていると思います。木造の建物でも集成材などを使用しているいろいろな形のものを作り、強さもブラジルよりも強く作ることは驚きました。また、大きな工事でも小さな工事でも同じレベルで施工されていることにも感じました。レベルの高い技術はブラジルにもありますが、値段が2倍ほど高くなるので普通の建物にはあまり使いません。ブラジルでは地震がないので、住宅はレンガやブロックで作ります。鉄筋コンクリートで作るのは少ないのです。

日本の建築は、法律や施工監理がしっかりしているので、たくさんの建物を見て、ブラジルに帰ったときに参考にしたいと思います。

—富山県土木部営繕課・川上 葛池 幸



伝統文化の再現



私の住む金沢は、言うまでもなく加賀藩の伝統が色濃い、その本拠地である。しかし、金沢に住んでいる人々は意外とそのことに無頓着で、むしろ周辺部の人から金沢の伝統について聞かされるのが圧倒的に多い。灯台下暗しとは、どんな場合でもよくあることだ。

思うことは、加賀藩の伝統を上手に現代に生かすことができれば、たとえば「まちおこし」「むらおこし」の視点でものを考えると、大変な威力を発揮するだろうということである。けだし、二百年以上のあいだ、文化に造詣の深い藩主が、現代では絶対にできない形、制度のもとで、力や財を集めてつくりあげたものなのである。いってみれば、本物のなかの超一級品ばかりをつかい、驚くべき感性でそれを使いこなしている。今日では、その百分の一の労力をかけることすらなかなか困難な代物なのである。一方で、京都でときに鼻につく「これでもか」というところがないのも面白い。ちょっと玄人好みではあるが、これを開花させる才能を得れば、その魅力はまだ再現できるだろう。

行政でなければできないことだろうが、加賀藩の伝統をもう一度上手にひっぱり出してくることは急務だと思うし、成功した暁には労力に比べてその威力は図り知れないほど大きい。

—樹心院研究所（伝統文化研究）代表・広岡治樹

シリーズ北陸の酒 ～再び石川の酒～

急遽、編集の責任上このコーナーを再び執筆することになった。困った私は普段行きつけの酒屋さんであるマルチュ酒販を訪れることにした。金沢の郊外、松任市に店を構えるこの酒屋さんの若主人は、かなりお酒にうるさい人である。かつて地酒蔵と称する別店舗を出しておられ、ここで私は地元の手取川という吟醸酒が全国でも最も旨い酒の一つであることを知ることができた。今度の取材で改めて若主人にお褒めのお酒をうかがったので、以下に紹介することにする。

まず、加賀蔵を挙げていただいた。山田錦100%の大吟醸で一升¥3,800、また山田錦60%・金紋錦40%の純米吟醸酒で¥2,800。この銘柄はきわめてお買得だという。山田錦は酒造りのための最高級米であり、つくりからすれば¥5,000～¥10,000の大吟醸に匹敵するのだそうだ。製造元の福光屋は金沢を代表する大メーカーだが、この酒への打込みようは相当なものであるらしい。フルーティな中にも米の旨味が生きている、との若主人の評である。



今一つは、昨年の金賞受賞という弁慶の大吟醸である。¥5,000と¥10,000がある。これも石川の酒だが、小さな蔵で宣伝もされていない。しかし手取川や天狗の舞と肩を並べる高いレベルの蔵だそうだ。フルーツ香が強く出ていて女性でもワインのように呑めるとの評。とにかく呑んでみるのが一番と若主人にうまく乗せられた形で4合瓶を買って帰ることになる。今この原稿を書きながらも、つい呑みたくって愛用のぐい呑みで呑んでいる次第である。飽きない甘さに麴が香り、しかも厚みがあって呑んだなという実感がある。マルチュ酒販の若主人は、実は日本海側に2～3人しかいないワインのメイユール・ソムリエである。普通のソムリエではない。店にはフランスはもとよりドイツ、オーストラリア、カリフォルニア、そしてチリなど世界の旨いワインが並んでいる。ワインの試飲会や無料の出張講師などお忙しい毎日のようだ。

—広報部会・増田達男



失って
欲しくない
風景がある。

(信州大学大学院生・吉本哲朗)



本物を造り続ける職人になりたい

(富山国際職芸学院・住吉秀記)